

あれこれ見聞録

第二十回 歌人「岡麓」と池田

三丁目 薄井孝彦

明治から昭和にかけてアララギ派の重鎮として活躍し、芸術院会員となつた「岡麓（ふもと）」の終焉の家が内釜にあります。岡麓と池田との係わりを紹介します。

○生い立ち

麓は明治10年、東京文京区に、將軍係り付の医者の子として生まれ、名前は三郎と言います。

6歳で書を学び、13歳でその奥義をきわめ、その頃には誰にも教えられず、指を折って短歌づくりをしていたと言われています。16歳で佐々木信綱に和歌を学び、23歳の時、和歌革新を唱える正岡子規の門に入り、長塚節・斎藤茂吉らと知り合い歌の道に精励しました。

岡麓の師 正岡子規
—余命10年で日本語を革新した男—

ここで、麓の師匠である正岡子規の偉大な業績を平成15年の「その時歴史が動いた」から紹介します。

・・・明治時代、23歳で

結核に冒され、余命10年と自覚した子規は、古文調で難解な日本語を、誰でも簡単に美しい表現として書ける「写生文」を提案、これが全国に広がり、夏目漱石・森鷗外らの文章にもとり入れられ、近代日本文学の基となったばかりでなく、現代私たちが使っている日本語の原形となった。・・・子規は短歌にも「写生文」を取り入れ、写実的・生活密着の歌風のアララギ派を立ち上げ、現在に到るまで短歌界最大の流派となりました。

麓の歌風は、「万葉集」に本質を置いた歌に、子規直伝の写生を理論的に吹きこんだもので、都会的に洗練された典雅な歌と評されています。

子規も麓を高く評価し、「麓氏の歌一変し、再変す」と述べています。麓は島木赤彦、斎藤茂吉、中村健吉などとアララギ派の中心を担ってきました。

歌を詠み 書を教えて 一生を終えた 岡麓

麓は第二次世界大戦の戦火をのがれるため、昭和20年5月（68歳）に歌人小谷計雄（大雪溪株式会社先代社長薄井計雄氏）の援助のもと、内釜の仮寓に移り住みました。

これには、子規の教え「都会生まれの者は、一生に一度田舎住居をしてみなくてはダメだ」が影響していたと言われています。

7人家族（祖母、夫婦、末娘、孫2人、愛弟子）の慣れない田舎生活のうえ、中風を患い、大変な生活でしたが、苦難を乗り越えて歌集・「刈刈（かりかり）」、「ヒムロ」の創刊に携わり、「土夫根」、「湧井（わくい）」等の歌集も出版し、その歌境は一段と味わい深いものとなった言われています。

麓は歌と書を教え、池田町・長野県の文化興隆に尽力されました。

昭和26年、麓は夫人・娘に先立たれ、腎臓障害

により74歳で他界しました。世間的な地位・名声など気にせず、歌と書で占められた一生でした。

その遺徳を偲んで昭和55年、終焉の家を「内鎌草庵」として復元され、「湧井」の歌集にちなんで歌碑が建立されました。

「湧水の浅井の底のみえすきて 雨そそげども濁らざりけり」

麓の歌碑は洪田見八幡社の境内にもあります。

「夏消えぬ 雪の高山 やや遠に しばしば見とも 常あかなくに」

また、親交のあった4丁目の歌人桂川雄氏（現桂川印刷所）にも歌碑があります。

「家あるじ 折り炊く柴の 火移りを 湯に温ま おりつつぞ聞く」



岡麓の終焉の家「内釜草庵」

桂川正雄氏は昭和32年の宮中で行われた歌会始めの詠進歌に見事入選（次の歌）しました。

「西原に 引き揚げ家族の 家建ちて ともしびの見え 牛の声する」（池田町公民館横に歌碑あり）

桂川氏は「入選は岡先生のおかげである」としみじみと述べています。

なお、麓の書は清酒「大雪溪」のラベル字として今も使われています。

最後に麓の人となりを紹介します。

● この見聞録シリーズで何度も登場している仁科宋一郎氏は会染小学校の先生をしており、麓の孫（兄の敦君、生徒会長）を教えたこと。仁科氏は内鎌の田中実美氏宅の二階で数人と、麓に習字の講習を受けたこと。その際、孫を教えてくれる先生だといって、麓から

「ふるいたつ ちからあらたに もとめむに 初日の光 かがやかしけれ」という歌をいただいたこと。その折、「墨は乾いてから光る程度に磨（す）り下せ、何時までも字の品とか力が失せないものだ」と仰られた（※1）。

● 下のお孫さん（亨さん）の祖父の追憶・自分がバス投石事件を起こした際、祖父は、「悪いことは悪い、良いことはよい、人間は正直になりなさい」と物静かに言った（※2）。

【参考文献】

1. 岡麓翁遺墨保存会編：「内釜草庵 復元記念」91頁、昭和56年
2. 門下生編：「岡麓の言葉」205〜206頁 平成11年